

伊藤長七初代校長から引き継がれた小石川の教育について

10月22日（日）に、小石川の同窓会である紫友同窓会主催による「五中小石川創立105周年記念式典」が行われました。大勢の卒業生が集まり、またPTA有志の合唱団体小石川カンターレがコーラスを披露して、華々しく創立105周年のお祝いをいたしました。

式典では私からのご挨拶として、「現在の小石川の生徒たちの活動は、源流をたどれば、伊藤長七初代校長先生の唱えられた「立志・開拓・創作」の理念に行き着くと考えます。（中略）現在、小石川の生徒たちが毎日取り組む学習や研究などの諸活動は、まさに今から105年前伊藤長七初代校長先生の唱えられた理念そのものを継承していると感じます。

学校の教育に不易流行があるとすれば、小石川の教育の根幹、すなわち不易としての「立志、開拓、創作」があって、105年変わることなく脈々として小石川に受け継がれており、一方で、流行の部分として、スーパーサイエンスハイスクールとしての取り組みや、MATLABやRを用いたデータサイエンスの導入、探究型課題研究を取り入れた教育を行っていることがあり、こうした不易と流行が関連し合って、現在の小石川の生徒たちにより高い力を身に付けさせることができていると自負します。」と申し上げました。

現在の東京都立小石川中等教育学校は、大正8年（1919年）4月に旧制府立第五中学校として開校しました。

初代校長の伊藤長七先生は、大正期の開明的な教育者で、残された記録や手紙文などを見ると、とてもスケールの大きな人物、かつ教育者として型破りな方であったことは間違いないところです。

前例や慣例にとらわれないで新しいことに取り組んだことや、世界中を旅行して国際交流を積極的に推し進めようとしたこと、教育に熱い情熱をもち、周囲の人を熱狂させてみんな友達してしまうこと、非常識と思えるほどの長さの手紙を書くとともに、いつ終わるかも分からない長い講話をしたことなど、他に例を見ない異能の人であったようです。

小石川の創立期のことは、紫友同窓会の編纂した「立志 開拓 創作 百年の系譜」をはじめとする周年誌にまとめられていて、それらを読むと当時の雰囲気伝わってきます。

伊藤長七先生は、新設の府立第五中学校の校長として、理化学教育の重視、優秀な教師陣を集め、特に女性教員の採用、ブレザー、ネクタイスタイルの標準服制定などを行いました。また、夏休みの農村体験である「夏期転地修養隊」の実施、「夏期休暇記念展覧会」「創作記念運動会」「学芸会」の実施、さらには鯉のぼりに風船を詰めて飛ばす「鯉あげ」や「熊鶴亀犬猿猫体操」を生徒たちに行わせるなど、前例のないことを創立期に次々と実行していったという記録が残っています。

また、伊藤長七先生の特筆すべき業績として、世界中を旅行したことがあげられます。

伊藤長七先生は、世界一周を2回も敢行したことを含め、4回も海外出張を行っています。

現在とは異なって、大正年間にはジェット機で海外に行くことができるわけではないので、船で海を渡り、陸路は蒸気機関車、あるいは馬やラクダを使い、徒歩での移動もしながら旅行したものと想像されます。

1回目の世界一周は当時の東京府による欧米各国の教育視察団の一員としての旅行で、1年以上の時間を

かけて行われましたが、伊藤長七先生は 1 万数千通もの日本の生徒たちからの手紙を持参し、その手紙を訪問地の学校に配って回ったということです。また、ワシントンで開催されていた海軍軍縮会議を傍聴した後、ハーディング大統領に面会するといった離れ業を演じています。

時代背景として、第一次世界大戦終了後の世界平和樹立の機運がきわめて高まっていた時期であったことが考えられますが、これまで全く学校同士の交流のないアメリカやヨーロッパの学校を突然に訪問して、若者の手紙を渡して読んでもらうといったことは、相当な困難をともなつたはずで、それをやり遂げてしまう行動力と、相手の懐に飛び込んで友達になってしまう人間力とがあつたに違いありません。

伊藤長七先生の交友の広さと出会った人にとっても強い印象を与えることについては、紫友同窓会が昨年上梓された書籍「我ら長七の教え子だった」にも書かれています。

伊藤長七先生がモデルとして登場しているとす文学作品は、島崎藤村「破戒」、夏目漱石「三四郎」などがあげられ、伊藤長七先生と交流があつたこうした日本近代文学の巨匠たちにも大きな印象を与えていたと思われまふ。

また、伊藤長七先生が 43 歳の若さでただの教員の立場から校長に大抜擢された背景として、東京朝日新聞に「黒風白雨楼」というペンネームで教育に関する「現在教育観」という寄稿を続けていたということもありますが、後藤新平内務大臣、新渡部稲造、澤柳政太郎、嘉納治五郎といった大きな影響力を持つ人たちとのネットワークがあり、後ろ盾となつてくれていたことがあるようです。それだけ行動力があつて魅力的な人物であつたということが想像できます。

昨年、紫友同窓会から、前述の書籍「我ら長七の教え子だった」とともに、伊藤長七先生が残した文書等の小冊子復刻本をいただきました。

こうした文書の原本が太平洋戦争の空襲で失われなかつた経緯を、私はお孫さんの伊藤博子さんにうかがいましたが、伊藤博子さんのお父様の努力によるところが非常に大きいということでした。おかげで私たちは教育者としての伊藤長七先生の思想を知ることができます。

小冊子とはいえ、一つ一つがとても長く、かつ文語体で書かれていたり漢語が多用されたりしているため、読むのに結構な手間がかかります。しかし、小冊子に書かれている文そのものの気迫やエネルギーは大変なもので、文頭から末尾まで衰えることなく、伊藤長七先生が膨大な情熱を有していた人であつたことが想像できます。

伊藤長七先生の教育思想については、伊藤長七研究委員会が紫友同窓会にあり、残された文献からさまざまな角度で研究を進めていらっしゃるとうかがっています。最も端的にその思想を表したのが「立志・開拓・創作」で、小石川の建学の精神、校是となっています。

小石川を志願している小学生とその保護者が大勢参加される学校説明会でも、私から「立志とは、自ら志を立てること、開拓とは自分が進む道を切り拓くこと、創作とは新しい文化を創り出すこと」と、とても簡潔に説明していますが、大正 9 年（1920 年）の入学式では、伊藤長七先生は校長として「立志・開拓・創造」とは何かを入学式で説明をしていらっしゃる、その言葉は小冊子を読むとさらにこの校是が何を意味しているか、どんな思いが込められているかを理解することができます。

そして、さらに「立志・開拓・創作」を生み出した思想的な背景として、「全人間的教養」の重要性と国際理解・国際親善、合理性の追求、高い志操と自主的精神の必要性、といった考え方があるように思われます。

伊藤長七先生の「全人間的教養」の考え方は、現在の小石川には「小石川教養主義」として引き継がれました。「小石川教養主義」という言葉を教育の柱として明確に位置付けされたのは、小石川が中高一貫教育校に改編されて2代目の校長であった栗原卯田子先生であったとかがっています。

高等学校を大学受験のための予備校のように考える効率主義的な考え方とは真逆である「小石川教養主義」は、小石川の最も重要な教育活動の柱となっています。

国際親善の考え方は小石川が全生徒参加で実施するオーストラリア・アデレード海外語学研修、シンガポール海外研修旅行を実施する国際理解教育に引き継がれています。オーストラリア・アデレード海外語学研修は、中高一貫教育校としての最初の校長であった遠藤隆二校先生が、中等教育学校開校時に前期課程3年生全員の参加する海外短期留学を相当がんばってスタートさせたと聞いています。

そしてさらに理化教育を推進する建学時のミッションは、進んだ理数教育を行うスーパーサイエンススクールとして引き継がれています。そうして考えると、伊藤長七初代校長先生の卓越した教育思想は、105年の時間の経過を経ても、脈々と現在の小石川に受け継がれていると言って過言ではありません。

小石川の教育活動の柱となっている「小石川教養主義」「国際理解教育」「理数教育」「生徒の自治活動」「部活動」「学校行事」などのそれぞれのカテゴリーの源流をたどっていくと、105年前の伊藤長七初代校長先生の教育思想に源をもっているように考えます。

さて、現在の小石川は、いろんな教育活動が同時に進行していく学校です。

生徒たちは6年間の中で全ての教科のいろんな授業を受け、自分でテーマを決める課題研究、生徒の自主によって運営される学校行事、部活動、海外研修などさまざまな経験を積んで学校生活を送ります。このような教育活動の内側では教員はどんな指導をしているのか、生徒たちの主体的な活動はどのように行われるのかといったことを横断的に整理すると、「知識・技能の獲得」「思考力・表現力の育成」「ICTの活用・データの活用」「体験・実験・実習」です。

これらの4項目が、きわめて高いレベルで毎日の学習、研究、活動で実施されています。

そして、とても大事なものは、この4項目の中心にあるのは、「面白いことをどんどん突き詰めてみよう」とか「新しいことにさらに挑戦してみよう」とか「人がやっていないことに取り組んでみよう」といった積極的で能動的な情動のようなものであるということです。

実は私が伊藤長七先生の残した小冊子を読んで一番感じるのは、この積極的で能動的な情動のようなものです。小石川で生徒たちの「面白いことをどんどん突き詰めてみよう」とか「新しいことにさらに挑戦してみよう」とか「人がやっていないことに取り組んでみよう」に触れるたびに、学校の創始者のもつ精神は、確実に今につながって引き継がれていると感じています。